この人に聞く

オアシス２１オーガニックファーマーズ朝市村の挑戦！

－名古屋のど真ん中で行列ができる朝市、新規就農者は30人以上

≪ 吉野 隆子 さん≫

オーガニックファーマーズ名古屋代表
全国有機農業推進協議会理事

●インタビューアー　原卓郎（東海自治体問題研究所事務局長）

皆さんは、名古屋のど真ん中で、有機・自然農業を営む農家が愛知・岐阜・三重・長野・静岡から毎週土曜日に集まって朝市を行い、賑わっているのをご存じでしょうか。しかも、会場では就農相談も行い、この間新規就農者を30人以上育てています。

当研究所会員の関根佳恵先生（愛知学院大学）の新著「13歳からの食と農」（かもがわ出版）では、この名古屋の都心にあるオアシス21で毎週朝市を実施し、就農相談も行っている「オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村」の取り組みを紹介されていました。

そこで、朝市村の村長を務める吉野隆子さんのもとを2020年12月22日に訪れ、お話を伺いました。

■吉野さんがオアシス21で朝市村を始めるに至る経緯を教えてください

（1）有機農業への関心の深まり

食べ物と身体の関係に関心を持った最初のきっかけは、高校時代に体調を崩したとき、母親が玄米采食に切り替えて驚くほど体調が改善した体験からです。その体験から有機農産物に関心を持つようになりました。

農の世界との具体的な結びつきは、夫の転勤で名古屋に転居した際、有機農産物や自然食品を扱う宅配サービスを行う「にんじんCLUB」の会員になって1年後です。

そこで提携生産者との交流会に参加したことをきっかけに、まったく興味のなかった農業に興味を持ちました。にんじんCLUBから「事務所のスタッフになりませんか」と声がかかり、運営や通信の編集などに携わるようになりました。並行して、「中部リサイクル運動市民の会」の発行していた雑誌編集にも関わっていたので、ゴミや環境問題などとのつながりの中で農業の問題を考えるようになっていきました。

コロナ前、2016年11月の朝市村風景

こうして、本格的に農業を勉強したいと思っていた頃、夫の転勤で東京へ戻ることになり、思い切って東京農業大学に学士入学。２年間で農学部４年分の単位をすべて取得しました。

（2）「販路拡大が課題」と知る

やがて、ゼミ仲間の大学院生に誘われて有機農業者が集まる「全国産直産地リーダー協議会」に事務局員として関わり始めました。

そうそうたるメンバーが喧々諤々の議論をする会は刺激的で、大変勉強になりました。その議論の中で、「有機農業を始める若者は多い。しかし、販路がないのでやめていく人も多い」という話を何度も聞き、販路の確保がネックとなっていることを知り、「いつか新規就農者の販路をつくれたら」と思うようになりました。

（3）知り合いの名古屋市職員からの打診がきっかけ－販路拡大につながるなら…

夫の転勤で再び名古屋に戻った2004年、以前から知り合いだった名古屋市職員がオアシス21（2002年オープン）に出向されていて、休日の朝の賑わいの創出と名物となるような事業をという市長からの指示に、朝市を思いついて私に相談してきました。

そこで、有機農業者の販路につながればと、にんじんCLUBスタッフ時代に知り合った有機農業者に呼びかけて「朝市村実行委員会」を立ち上げ、2004年10月、開催にこぎつけました（当初は月２回）。

■始めてみて、反響はどうでしたか

（1）最初は苦戦、そして賑わいへ

当初は10戸程の農家、来客数は100人前後と苦戦し、チラシを作って一人で周辺の一戸一戸にポスティングして歩くなど、地道なPR 活動をつづけました。

そのうち、徐々に口コミで来客数が増えていきました。

開始１年後に来場者アンケートを取ったところ、「何で知りましたか」という問いには、口コミという回答が最も多くなっていました。

新聞やテレビで紹介していただいたことも後押しとなり、コロナ禍以前は1,000人を超す参加者でにぎわうようになりました。

（2）他の場所でも開催へ、広がる取り組み（コロナ禍で現在は休止中）

2013年からは、他の２か所でも開催するようになりました。

一つは、名古屋駅名鉄百貨店前にあるナナちゃんストリートです。ここでは、毎週火曜日15時30分～18時30分の夕ぐれ時に、「ナナちゃんストリートオーガニック夕ぐれ市」が開かれるようになりました。

もう一つは、名古屋市緑区内にある南生協病院です。「オーガニックファーマーズ朝市村」のメンバーを中心に、知多半島に就農した農家も加わって「みどりオーガニックマーケットin南生協病院」が毎週木曜日10時～13時に開かれるようになりました。

残念ながら、この二つは、コロナの関係でイベントを中止する流れの中で、休止しています。

（3）オアシス21では、コロナ対策を施して再開し、参加者は400～500人に

なお、コロナの影響によりオアシス21で開催できなくなった当初、移動マルシェという形で事務所前で再開した後、オアシス21の営業再開に合わせて５月23日から再開しました。

2020年12月の朝市村風景（スタッフの集合写真）

再開にあたっては、①周囲を囲い、ブース間の距離を広くとる、②行列ができないよう7時半から整理券を発行（整理券に記載した時間に入場していただく）、③来場者には消毒をお願いする、④現金はトレイを使って受け渡す、⑤出店者はマスクを着用する、などの対策を取りました。来場者にも、マスク着用等をお願いしています。

整理券を配布する７時半には60～70人の列ができ、来場者数は400～500人となっています。

また、コロナ禍の中、運送業者から配達をやりたいという申し出があり（市内500円）、配送先をみると、近くからの参加者だけでなく、周辺区からの参加者が多いことがわかりました。そして、そのことにたぶん、敬老パスが寄与していることも見えてきました。

（4）現在の登録農家は64戸

取り組みが広がる中で、現在の登録農家は64戸となっています。

当初は苦戦していたため、こちらからお願いして来ていただいた初期の農家は離れた方もあり、第１回目から継続している農家は残念ながら1戸しかありませんが、朝市村の農家で研修して就農していった農家の方々を中心に、その輪は広がり、現在は登録農家64戸となっています。

生産者同士は販売上のライバルでもありますが、仲間の畑を見に行ったりする仲間でもあり、先に就農した人が新規就農者をサポートしており、販路の紹介や栽培方法の伝授なども行われ、お互いが切磋琢磨することにより、確実に品質も上がっています。

出店する農家は、野菜や米の生産者は有機で非農家から新規就農した農家、及び親元就農で継承時などに有機に転換した農家。果樹やお茶などの永年作物については新規でなくとも受け入れています。

有機JAS認証を必須とはしていませんが、現在出店しているベテラン生産者とともに現地に出向いて栽培状況を確認し、生産者と話をした上で判断しています。

（5）来場者のニーズは品質

開始１年目のアンケートで朝市に来る理由も尋ねましたが、意外にも、安心・安全を求めてという回答は少なく、おいしいからという回答が多く寄せられていました。

実際「おいしいし、日持ちもよいので、週1回の買い物で1週間過ごせる」という声をよく聞きます。

私自身、月２回の開催では食卓を担うことは難しく、イベントになってしまうため、毎週開催することによって有機の野菜を毎日食卓に並べることが可能になると考え、月２回から週１回に開催回数を増やすようオアシス21にお願いして2009年から実施にこぎつけた経緯があるので、この評価はうれしく思っています。

また、ミシュランの星のついたフレンチやイタリアンの方も買いに来ますし、中には、育ててほしい野菜の種を持ってきて「これを栽培してよ、全量買い取るから」とリクエストするシェフもいます。

生産者と消費者が直接顔を合わせてやり取りできるのも、ここの朝市のよさとなっています。

■新規就農支援はどのよう進められたのでしょうか

（1）直接相談できる場づくり

2006年に超党派による議員立法で「有機農業推進法」ができ、翌年基本計画ができて有機農業での参入促進事業が始まりました。当初からこの事業に関わっていたこともあり、全国の状況を調べてみると、電話で相談を受けてくださるところはありましたが、定期的に対面の相談コーナーを設けているのは皆無でした。

朝市村では、すでに新規就農の相談にくるお客さんはいたので、それならここでやろうと、2009年から、東海農政局の協力も得て、朝市村開催時に新規就農の相談コーナーを設けることにしました。

現在はコロナの関係で休止していますが、

月１回の夜間の有機農業講座にも取り組んできました。

なお、朝市村を愛知県の研修先としても登録（６農家で受け入れ可能）しています。

（2）新規就農＝中山間地への移住が進む

就農相談は、不況になると増える傾向はあります。リーマンショック時は最も多く１日５件の相談という日もありましたが、そうした際の相談は、土地と種さえあればなんとかなると安易に考えての相談も多く、就農に至らないケースが多かったです。

むしろ、大企業に勤めていて農業をやりたいと思うようになり、農業への転職を考えてていねいに調べたうえで相談に来るような人たちが、確実に就農につながっています。

しかも、そうした新規就農者たちが、中山間地に移住して活躍しています。

岐阜県白川町は、岐阜県の消滅可能性第１位とされた自治体ですが、実は、朝市村の就農相談を通して移住した人たちがいます。現在白川町から14戸の農家が参加していますが、その多くが朝市村から就農した人たちです。朝市村で販売実習していた新規就農者がお客さんで来ていた女性と出会って結婚したという例もあります。

移住した人は、林業や狩猟にも興味を持ち、行っている人がいますが、農業だけに拘らず、その地域にある資源を生かした暮らしぶりは、その地に適した、昔ながらの暮らしのスタイルだったということもあります。

白川町への移住者は、先に移住した人が、自分も多くの人のお世話を受けてやってくることができたという思いから、新しい就農希望者の研修や生活面を支援しており、そうしたことが、継続的な移住・定住につながっています。

朝市村は、都市と農村を結ぶことにも役立っています。

■自治体行政への期待

（1）場の提供

補助金は、永続的なものではないので、依存せずに自前でやっていこうと考えてやってきました。その結果、最初の10年間は無償のボランティアとして運営してきました。

無償で場を提供していただけることで、本当に助かっています。

だからこそ、出店者は、年会費3,000円と机１本2,000円で出店でき、農産物の値段は各農家が自由に設定し、売り上げもそのまま各農家に還元されます。

新規就農者の支援として、補助金がなくても行政から無償で場の提供がなされれば、もっと広がっていくのではないでしょうか。

（2）学校給食に有機農産物を

朝市村から白川町に移住して就農する人は、地元の農家や先行した移住者が支援する形で増えてきました。移住者が増えることで次第に行政も目を向けてくれるようになり、中には白川町から移住相談員を委嘱される人も現れています。

一方で、自治体のイニシアチブのおかげで進むこともあります。その一つが学校給食への地元産の有機農産物の導入です。子どもの健康を育み、地域の有機農業と環境を守るというという観点から、ぜひ積極的に取り組んでいただけたらと願っています。

★オーガニックファ―マーズ朝市村の取り組みを紹介した文献

「13歳からの食と農」（関根佳恵著、2020年、かもがわ出版）

「有機農業の力ーコロナ時代を生きる知恵」（大江正章著、2020年、コモンズ）